離散最適化基礎論　第 2 回

準同型の基本性質 (1)：部分構造

岡本 吉央
okamotoy@uec.ac.jp

電気通信大学

2021 年 10 月 12 日

最終更新：2021 年 10 月 13 日　13:41

スケジュール 前半 (予定)

1. グラフの彩色と準同型 (10/5)
2. 準同型の基本性質 (1)：部分構造 (10/12)
3. 準同型の基本性質 (2)：準同型の合成 (10/19)
4. グラフの円彩色 (10/26)
5. グラフの分数彩色 (11/2)
6. グラフの積と準同型 (11/9)
7. 頂点可移性と準同型 (11/16)

★ 調布祭片付け のため 休み (11/23)

8. グラフの商と引き込み (11/30)

注意：予定の変更もありうる

スケジュール 後半 (予定)

- ⋆ 国内出張 のため 休み (12/7)
- 9 グラフのコア (12/14)
- 10 準同型が導く半順序 (1)：構成 (12/21)
- 11 準同型が導く半順序 (2)：構造 (1/4)
- 12 アルゴリズム (1)：例 (1/11)
- 13 アルゴリズム (2)：整合性 (1/18)
- 14 アルゴリズム (3)：双対性 (1/25)
- ⋆ 予備 (2/8)

注意：予定の変更もありうる

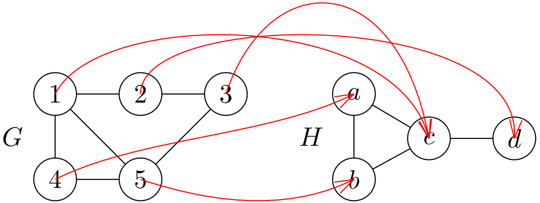
グラフの準同型写像

無向グラフ G, H

定義：準同型写像とは？

G から H への **準同型写像** (homomorphism) とは，
写像 $f\colon V(G) \to V(H)$ で，次を満たすもの

$$\{u, v\} \in E(G) \quad \Rightarrow \quad \{f(u), f(v)\} \in E(H)$$



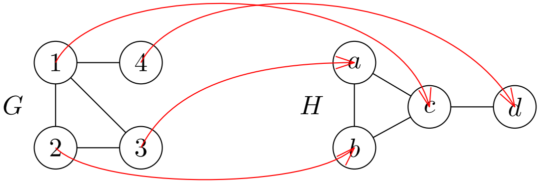
$$f\colon \begin{array}{ccc} 1 & \longmapsto & c \\ 2 & \longmapsto & d \\ 3 & \longmapsto & c \\ 4 & \longmapsto & a \\ 5 & \longmapsto & b \end{array}$$

無向グラフ G, H

定義：同型写像とは？

G から H への **同型写像** (isomorphism) とは，
全単射 $f\colon V(G) \to V(H)$ で，次を満たすもの

$$\{u, v\} \in E(G) \quad \Leftrightarrow \quad \{f(u), f(v)\} \in E(H)$$



$\boxed{注}$：同型写像は準同型写像

グラフ G, H

記法

G から H への準同型写像が存在するとき，次のように書くことがある

$$G \to H$$

G から H への同型写像が存在するとき，次のように書くことがある

$$G \simeq H$$

注意

- 以後，
  単に「グラフ」と書いたら，無向グラフと有向グラフの両方を指す
- 区別が必要な場合は「無向グラフ」，「有向グラフ」と書く

今日の目標

準同型の存在性・非存在性を証明するための技法を使えるようになる

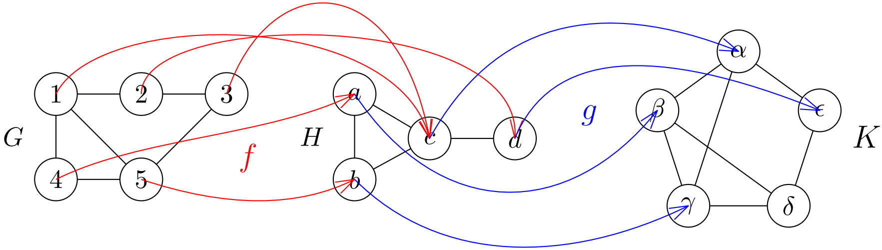
- 着眼点 1：奇内周
- 着眼点 2：独立比 (非準同型補題)

目次

グラフ G, H, K

性質：準同型の合成も準同型

$$\left.\begin{array}{l} f \text{ が } G \text{ から } H \text{ への準同型} \\ g \text{ が } H \text{ から } K \text{ への準同型} \end{array}\right\} \Rightarrow \quad g \circ f \text{ は } G \text{ から } K \text{ への準同型}$$

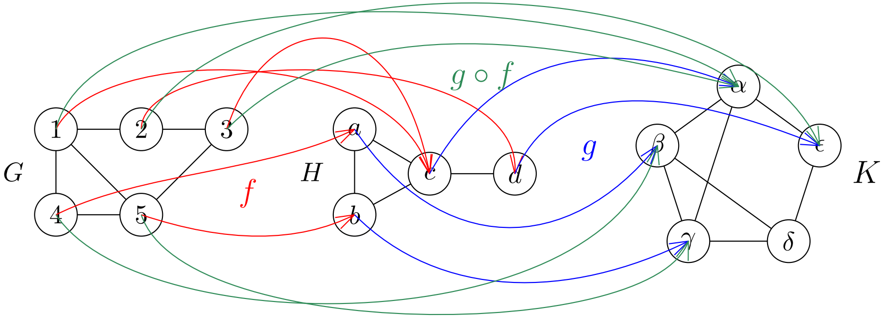


$\boxed{\text{注}}$：合成の定義 $\to (g \circ f)(v) = g(f(v))$

グラフ G, H, K

性質：準同型の合成も準同型

$$\left.\begin{array}{l} f \text{ が } G \text{ から } H \text{ への準同型} \\ g \text{ が } H \text{ から } K \text{ への準同型} \end{array}\right\} \Rightarrow \quad g \circ f \text{ は } G \text{ から } K \text{ への準同型}$$

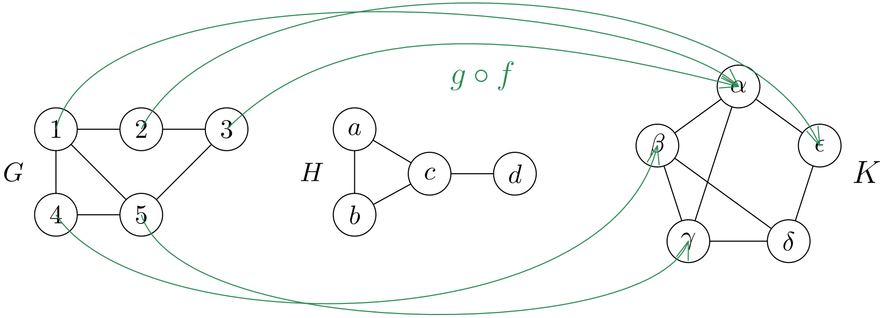


$\boxed{\text{注}}$：合成の定義 $\rightarrow$ $(g \circ f)(v) = g(f(v))$

グラフ G, H, K

性質：準同型の合成も準同型

$$\left.\begin{array}{l} f \text{ が } G \text{ から } H \text{ への準同型} \\ g \text{ が } H \text{ から } K \text{ への準同型} \end{array}\right\} \Rightarrow g \circ f \text{ は } G \text{ から } K \text{ への準同型}$$



$\boxed{\text{注}}$：合成の定義 $\rightarrow (g \circ f)(v) = g(f(v))$

証明：f が G から H への準同型，g が H から K への準同型であると仮定

- つまり，

$$\{u,v\} \in E(G) \Rightarrow \{f(u), f(v)\} \in E(H) \quad \text{(A)}$$
$$\{x,y\} \in E(H) \Rightarrow \{g(x), g(y)\} \in E(K) \quad \text{(B)}$$

- 証明すべきことは，$g \circ f$ が G から K への準同型であること，つまり

$$\{u,v\} \in E(G) \Rightarrow \{(g \circ f)(u), (g \circ f)(v)\} \in E(K)\}$$

準同型の合成も準同型：証明 (2) — 無向グラフの場合

- $\{u, v\} \in E(G)$ と仮定

- $$\{(g \circ f)(u), (g \circ f)(v)\} \in E(K)$$

前のページの復習

$$\{u, v\} \in E(G) \Rightarrow \{f(u), f(v)\} \in E(H) \qquad \text{(A)}$$

$$\{x, y\} \in E(H) \Rightarrow \{g(x), g(y)\} \in E(K) \qquad \text{(B)}$$

準同型の合成も準同型：証明 (2) — 無向グラフの場合

- $\{u, v\} \in E(G)$ と仮定
- このとき，(A) より，$\{f(u), f(v)\} \in E(H)$
- $\{(g \circ f)(u), (g \circ f)(v)\} \in E(K)$

前のページの復習

$$\{u, v\} \in E(G) \Rightarrow \{f(u), f(v)\} \in E(H) \quad \text{(A)}$$
$$\{x, y\} \in E(H) \Rightarrow \{g(x), g(y)\} \in E(K) \quad \text{(B)}$$

- $\{u, v\} \in E(G)$ と仮定
- このとき，(A) より，$\{f(u), f(v)\} \in E(H)$
- (B) において，$x = f(u), y = f(v)$ とすると，$\{g(f(u)), g(f(v))\} \in E(K)$
- $$\{(g \circ f)(u), (g \circ f)(v)\} \in E(K)$$

前のページの復習

$$\{u, v\} \in E(G) \Rightarrow \{f(u), f(v)\} \in E(H) \qquad \text{(A)}$$
$$\{x, y\} \in E(H) \Rightarrow \{g(x), g(y)\} \in E(K) \qquad \text{(B)}$$

準同型の合成も準同型：証明 (2) — 無向グラフの場合

- $\{u, v\} \in E(G)$ と仮定
- このとき，(A) より，$\{f(u), f(v)\} \in E(H)$
- (B) において，$x = f(u), y = f(v)$ とすると，
  $\{g(f(u)), g(f(v))\} \in E(K)$
- $\{g(f(u)), g(f(v))\} = \{(g \circ f)(u), (g \circ f)(v)\}$ なので，
  $\{(g \circ f)(u), (g \circ f)(v)\} \in E(K)$ □

有向グラフの場合も同様に証明できる

前のページの復習

$$\{u, v\} \in E(G) \Rightarrow \{f(u), f(v)\} \in E(H) \quad \text{(A)}$$

$$\{x, y\} \in E(H) \Rightarrow \{g(x), g(y)\} \in E(K) \quad \text{(B)}$$

準同型の合成も準同型：別の表現

グラフ G, H, K

性質：準同型の合成も準同型

$$\left.\begin{array}{l} f \text{ が } G \text{ から } H \text{ への準同型} \\ g \text{ が } H \text{ から } K \text{ への準同型} \end{array}\right\} \Rightarrow \quad g \circ f \text{ は } G \text{ から } K \text{ への準同型}$$

準同型の合成も準同型：別の表現

グラフ G, H, K

性質：準同型の合成も準同型

$$\left.\begin{array}{l} f \text{ が } G \text{ から } H \text{ への準同型} \\ g \text{ が } H \text{ から } K \text{ への準同型} \end{array}\right\} \Rightarrow \quad g \circ f \text{ は } G \text{ から } K \text{ への準同型}$$

性質：準同型の合成も準同型 (別の表現)

$$G \to H \quad \text{かつ} \quad H \to K \qquad \Rightarrow \qquad G \to K$$

「別の表現」の視点を次回の講義で深める

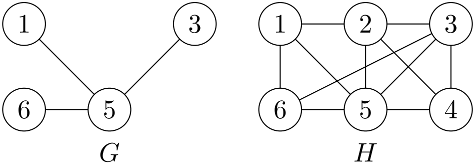
目次

無向グラフ G, H

定義：部分グラフとは？

G が H の **部分グラフ** (subgraph) であるとは，
$V(G) \subseteq V(H)$ かつ $E(G) \subseteq E(H)$ が成り立つこと

G が H の部分グラフであることを「$G \subseteq H$」と表記し，
H が G を含むともいう

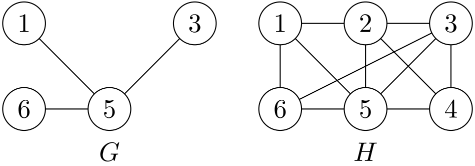


有向グラフにおける部分グラフも同様に定義される

グラフ G, H

性質：部分グラフと準同型

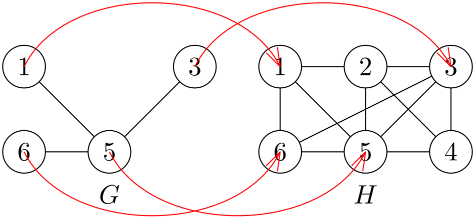
$$G \subseteq H \quad \Rightarrow \quad G \to H$$



グラフ G, H

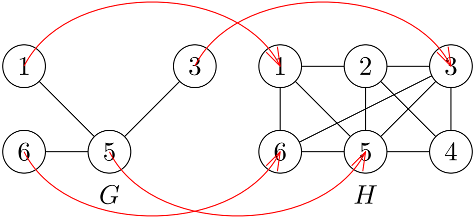
性質：部分グラフと準同型

$$G \subseteq H \quad \Rightarrow \quad G \to H$$



<u>証明</u>：$G \subseteq H$ であると仮定 (注：$V(G) \subseteq V(H)$)

- 写像 $f\colon V(G) \to V(H)$ として，$f(v) = v$ ($\forall\, v \in V(G)$) を考える
- このとき，$\{u, v\} \in E(G)$ ならば，$\{u, v\} \in E(H)$ $(\because G \subseteq H)$
- $\therefore f$ は G から H への準同型写像 $\square$



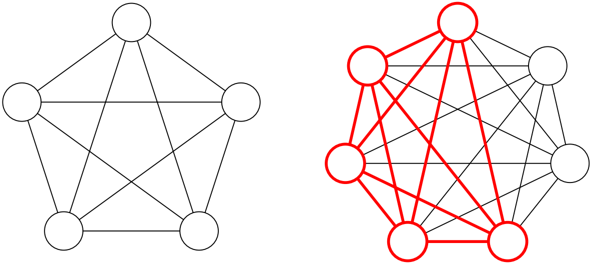
正整数 n, m

性質：完全グラフと準同型

1. $n \leq m \Rightarrow K_n \to K_m$
2. $n > m \Rightarrow K_n \not\to K_m$

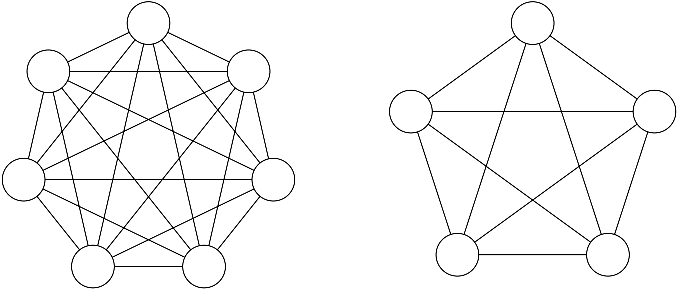
証明：

1. $n \leq m$ のとき，K_n は K_m の部分グラフ (と同型) □
2. 次のページ



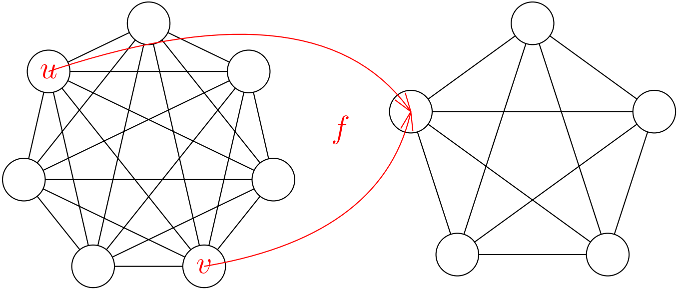
<u>証明 (続き)</u>：$n > m$ とし，任意の写像 $f\colon V(K_n) \to V(K_m)$ を考える

- $n > m$ なので，ある 2 頂点 $u, v \in V(K_n)$ に対して，$f(u) = f(v)$
- このとき，$\{u, v\} \in E(K_n)$ であるが，$\{f(u), f(v)\} \notin E(K_m)$
- したがって，f は準同型写像にならない $\square$



証明 (続き)：$n > m$ とし，任意の写像 $f\colon V(K_n) \to V(K_m)$ を考える

- $n > m$ なので，ある 2 頂点 $u, v \in V(K_n)$ に対して，$f(u) = f(v)$
- このとき，$\{u, v\} \in E(K_n)$ であるが，$\{f(u), f(v)\} \notin E(K_m)$
- したがって，f は準同型写像にならない $\square$

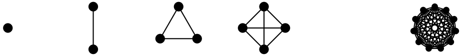


正整数 n, m

性質：完全グラフと準同型

1. $n \le m \Rightarrow K_n \to K_m$
2. $n > m \Rightarrow K_n \not\to K_m$

$$K_1 \mathrel{\substack{\rightarrow \\ \not\leftarrow}} K_2 \mathrel{\substack{\rightarrow \\ \not\leftarrow}} K_3 \mathrel{\substack{\rightarrow \\ \not\leftarrow}} K_4 \mathrel{\substack{\rightarrow \\ \not\leftarrow}} \cdots \mathrel{\substack{\rightarrow \\ \not\leftarrow}} K_n \mathrel{\substack{\rightarrow \\ \not\leftarrow}} \cdots$$



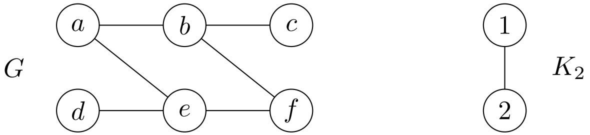
「矢印が一方向」に向かう無向グラフの無限列が得られる

無向グラフ G

定義：二部グラフとは？

G が **二部グラフ** (bipartite graph) であるとは，
G から K_2 への準同型写像が存在すること

「$G \to K_2$ を満たす G が二部グラフ」ということ



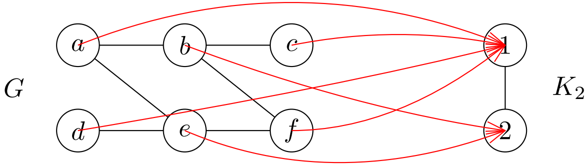
つまり，G が二部グラフであるとは，G が 2 彩色可能であること

無向グラフ G

定義：二部グラフとは？

G が **二部グラフ** (bipartite graph) であるとは，
G から K_2 への準同型写像が存在すること

「$G \to K_2$ を満たす G が二部グラフ」ということ



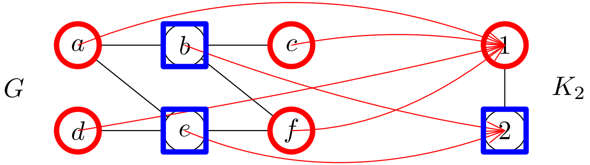
つまり，G が二部グラフであるとは，G が 2 彩色可能であること

無向グラフ G

定義：二部グラフとは？

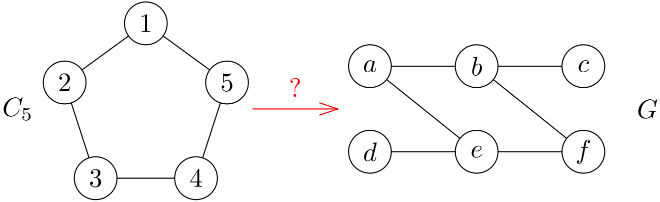
G が **二部グラフ** (bipartite graph) であるとは,
G から K_2 への準同型写像が存在すること

「$G \to K_2$ を満たす G が二部グラフ」ということ

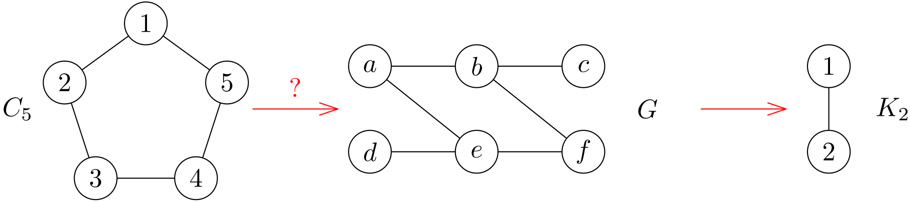


つまり，G が二部グラフであるとは，G が 2 彩色可能であること

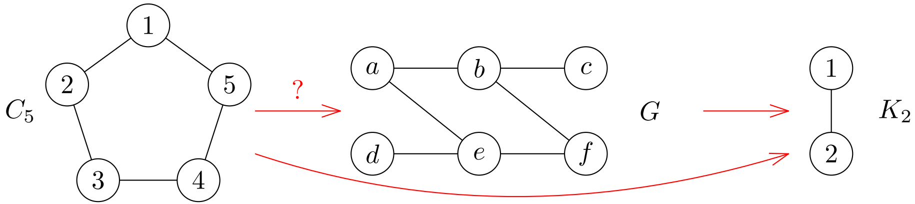
二部グラフと奇閉路：例



二部グラフと奇閉路：例



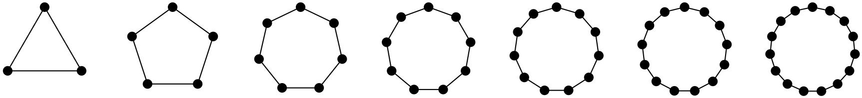
二部グラフと奇閉路：例



定義：奇閉路とは？

奇閉路 (odd cycle) とは，長さが奇数の閉路のこと

つまり，奇閉路とは，ある正整数 k に対する C_{2k+1} のこと



C_3 C_5 C_7 C_9 C_{11} C_{13} C_{15}

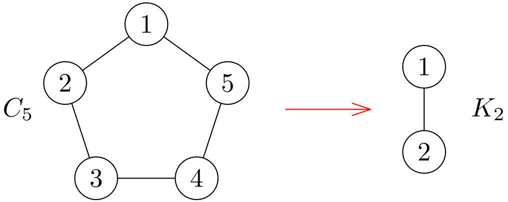
無向グラフ G, 正整数 k

性質：二部グラフと奇閉路

$$G\text{ が二部グラフ} \quad \Rightarrow \quad C_{2k+1} \not\to G$$

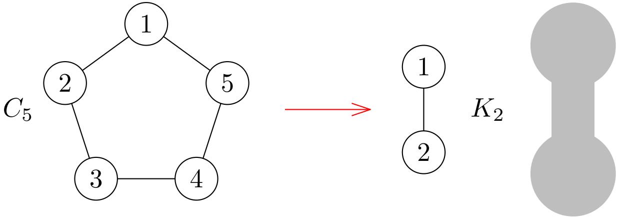
証明：$C_{2k+1} \to G$ であると仮定する

- G が二部グラフなので，$G \to K_2$
- したがって，$C_{2k+1} \to K_2$
- $V(C_{2k+1}) = \{1, 2, \dots, 2k+1\}$,
  $E(C_{2k+1}) = \{\{i, i+1\} \mid i = 1, \dots, 2k\} \cup \{\{2k+1, 1\}\}$ とする
- $V(K_2) = \{1, 2\}$, $E(K_2) = \{\{1, 2\}\}$ とする



証明 (続き)：準同型写像 $f\colon V(C_{2k+1}) \to V(K_2)$ を考える

- $f(1) = 1$ とすると，f は準同型写像なので
  $f(2) = 2, f(3) = 1, f(4) = 2, \ldots, f(2k) = 2, f(2k+1) = 1$
- このとき，$\{2k+1, 1\} \in E(C_{2k+1})$ であるが，
  $\{f(2k+1), f(1)\} = \{1, 1\} \notin E(K_2)$
- これは f が準同型写像であることに矛盾
- $f(1) = 2$ の場合も同様 $\square$



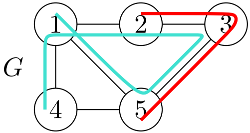
目次

無向グラフ G

定義：歩道とは？

G における **歩道** (walk) とは,
G の頂点の有限列 $v_1, v_2, \ldots, v_k$ で,
$\{v_i, v_{i+1}\} \in E(G)$ ($\forall\ i = 1, 2, \ldots, k-1$) を満たすもの

注：頂点 $v_1, \ldots, v_k$ が互いに異なる必要はない



$1, 5, 3, 2, 1, 4$
$5, 3, 2$

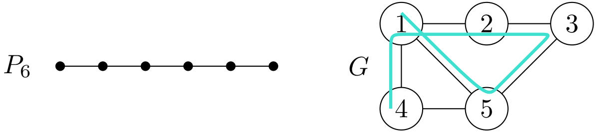
$k-1$ を 歩道の 長さ と呼ぶ

無向グラフ G，正整数 k

性質：道の準同型像としての歩道

$$P_k \to G \quad \Leftrightarrow \quad G \text{ には長さ } k-1 \text{ の歩道がある}$$

準同型の定義を考えれば，直ちに分かる (考えてみよ)

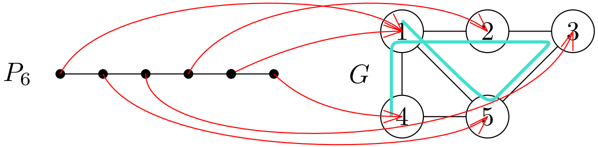


無向グラフ G，正整数 k

性質：道の準同型像としての歩道

$$P_k \to G \quad \Leftrightarrow \quad G \text{ には長さ } k-1 \text{ の歩道がある}$$

準同型の定義を考えれば，直ちに分かる (考えてみよ)



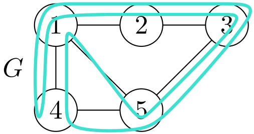
閉歩道

無向グラフ G

定義：閉歩道とは？

G における **閉歩道** (closed walk) とは，
G の頂点の有限列 $v_1, v_2, \ldots, v_k$ で，
$\{v_i, v_{i+1}\} \in E(G)$ ($\forall\, i = 1, 2, \ldots, k-1$) と $\{v_k, v_1\} \in E(G)$ を満たすもの

注：頂点 $v_1, \ldots, v_k$ が互いに異なる必要はない



$1, 2, 3, 5, 1, 4, 5, 3, 2, 1, 4$

k を 閉歩道の 長さ と呼ぶ

補足

$v_1, v_2, \ldots, v_k, v_1$ を閉歩道とする場合 (定義) もある

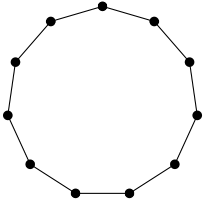
無向グラフ G，正整数 k

性質：閉路の準同型像としての閉歩道

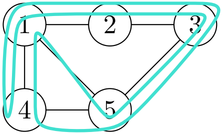
$$C_k \to G \quad \Leftrightarrow \quad G \text{ には長さ } k \text{ の閉歩道がある}$$

準同型の定義を考えれば，直ちに分かる (考えてみよ)

C_{11}



G



長さが奇数である閉歩道の性質

無向グラフ G，正整数 k

性質：奇閉歩道が作る奇閉路

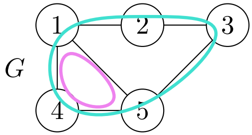
G が長さ $2k+1$ の閉歩道を含む $\Rightarrow$ G は長さ $2k+1$ 以下の奇閉路を含む

k に関する帰納法で証明できる

二部グラフではない無向グラフ G

定義：奇内周とは？

G の **奇内周** (odd girth) とは，G が含む奇閉路の最短長



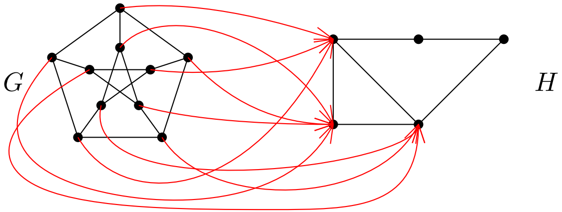
奇内周 $= 3$

$\boxed{\text{注}}$：二部グラフに対して，奇内周は定義されない

二部グラフではない無向グラフ G, H

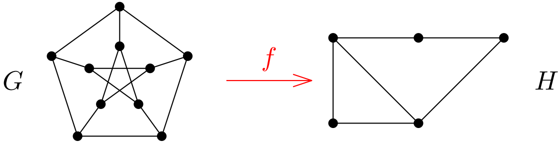
性質：グラフの奇内周と準同型

$$G \to H \quad \Rightarrow \quad G \text{ の奇内周} \geq H \text{ の奇内周}$$



証明：準同型写像 $f\colon V(G) \to V(H)$ を考える

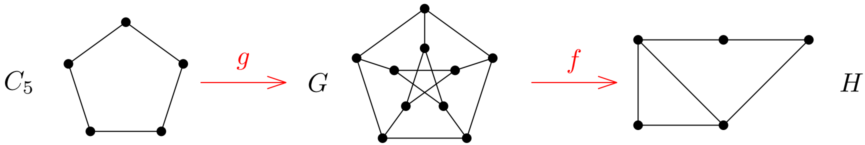
- G の奇内周 $= 2k+1$ とする
- このとき，準同型写像 $g\colon V(C_{2k+1}) \to V(G)$ が存在する
- ここで，$f \circ g$ は C_{2k+1} から H への準同型写像
- $\therefore$ H は長さ $2k+1$ の閉歩道を含む
- $\therefore$ H は長さ $2k+1$ 以下の奇閉路を含む
- $\therefore$ H の奇内周 $\leq 2k+1 =$ G の奇内周 $\square$



グラフの奇内周と準同型：証明

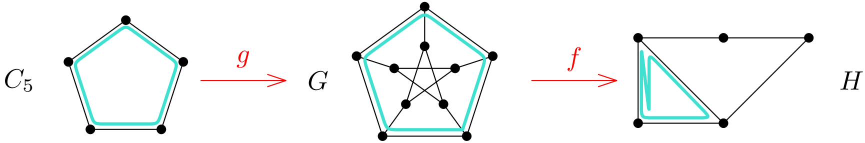
証明：準同型写像 $f\colon V(G) \to V(H)$ を考える

- G の奇内周 $= 2k+1$ とする
- このとき，準同型写像 $g\colon V(C_{2k+1}) \to V(G)$ が存在する
- ここで，$f \circ g$ は C_{2k+1} から H への準同型写像
- $\therefore$ H は長さ $2k+1$ の閉歩道を含む
- $\therefore$ H は長さ $2k+1$ 以下の奇閉路を含む
- $\therefore$ H の奇内周 $\leq 2k+1 =$ G の奇内周 □



<u>証明</u>：準同型写像 $f\colon V(G) \to V(H)$ を考える

- G の奇内周 $= 2k+1$ とする
- このとき，準同型写像 $g\colon V(C_{2k+1}) \to V(G)$ が存在する
- ここで，$f \circ g$ は C_{2k+1} から H への準同型写像
- $\therefore H$ は長さ $2k+1$ の閉歩道を含む
- $\therefore H$ は長さ $2k+1$ 以下の奇閉路を含む
- $\therefore H$ の奇内周 $\leq 2k+1 =$ G の奇内周 $\square$

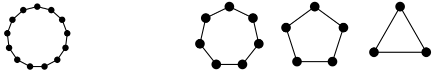


正整数 k, ℓ

性質：奇閉路間の準同型写像

1. $k \geq \ell \Rightarrow C_{2k+1} \to C_{2\ell+1}$
2. $k < \ell \Rightarrow C_{2k+1} \not\to C_{2\ell+1}$

$$\cdots \underset{\not\leftarrow}{\rightarrow} C_{2k+1} \underset{\not\leftarrow}{\rightarrow} \cdots \underset{\not\leftarrow}{\rightarrow} C_7 \underset{\not\leftarrow}{\rightarrow} C_5 \underset{\not\leftarrow}{\rightarrow} C_3$$



証明の流れ

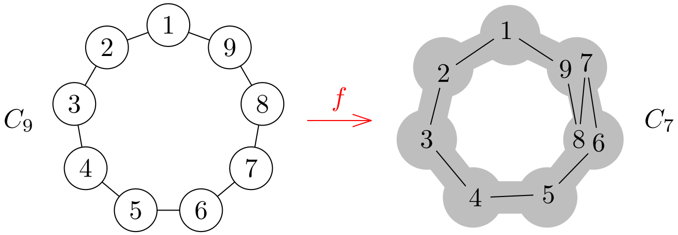
1. 実際に準同型写像を 1 つ構成すればよい
2. 奇内周を比較する

1 の証明：$C_{2k+3} \to C_{2k+1}$ を証明すれば十分

- $V(C_n) = \{1, 2, \ldots, n\}$,
  $E(G) = \{\{i, i+1\} \mid i = 1, 2, \ldots, n-1\} \cup \{\{n+1, 1\}\}$ とする
- 写像 $f\colon V(C_{2k+3}) \to V(C_{2k+1})$ を次のように定義する

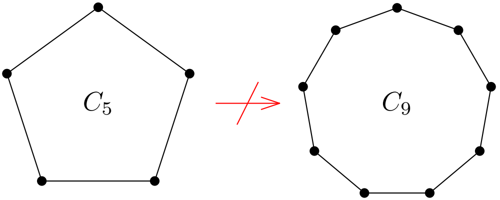
$$f(i) = \begin{cases} i & (i = 1, 2, \ldots, 2k+1), \\ 2k & (i = 2k+2), \\ 2k+1 & (i = 2k+3) \end{cases}$$

- このとき，f は C_{2k+3} から C_{2k+1} への準同型写像



2 の証明：$k < \ell$ とする

- C_{2k+1} の奇内周は $2k+1$
- $C_{2\ell+1}$ の奇内周は $2\ell+1$
- $k < \ell$ なので，C_{2k+1} の奇内周 $<$ $C_{2\ell+1}$ の奇内周
- $\therefore C_{2k+1} \not\to C_{2\ell+1}$ □



性質：グラフの奇内周と準同型 (復習)

$$G \to H \quad \Rightarrow \quad G \text{ の奇内周} \geq H \text{ の奇内周}$$

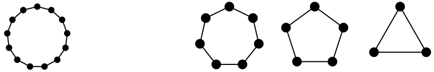
奇閉路に対する準同型の列

正整数 k, ℓ

性質：奇閉路間の準同型写像

1. $k \geq \ell \Rightarrow C_{2k+1} \to C_{2\ell+1}$
2. $k < \ell \Rightarrow C_{2k+1} \not\to C_{2\ell+1}$

$$\cdots \underset{\not\leftarrow}{\rightarrow} C_{2k+1} \underset{\not\leftarrow}{\rightarrow} \cdots \underset{\not\leftarrow}{\rightarrow} C_7 \underset{\not\leftarrow}{\rightarrow} C_5 \underset{\not\leftarrow}{\rightarrow} C_3$$



正整数 k, ℓ

性質：奇閉路間の準同型写像

1. $k \geq \ell \Rightarrow C_{2k+1} \to C_{2\ell+1}$
2. $k < \ell \Rightarrow C_{2k+1} \not\to C_{2\ell+1}$

$$K_2 \overset{\to}{\not\leftarrow} \cdots \overset{\to}{\not\leftarrow} C_{2k+1} \overset{\to}{\not\leftarrow} \cdots \overset{\to}{\not\leftarrow} C_7 \overset{\to}{\not\leftarrow} C_5 \overset{\to}{\not\leftarrow} C_3 \simeq K_3$$

K_2 と K_3 の「間」には「稠密」にグラフが存在する $\to$ 後の講義で詳しく

目次

無向グラフ G, H

性質：非準同型補題 (No-homomorphism lemma)　(Albertson, Collins '85)

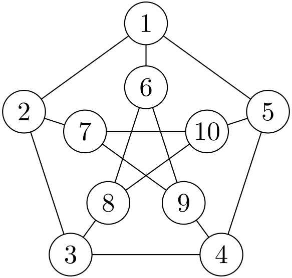
$$\begin{array}{l} G \to H \\ H \text{ が頂点可移} \end{array} \quad \Rightarrow \quad i(G) \geq i(H)$$

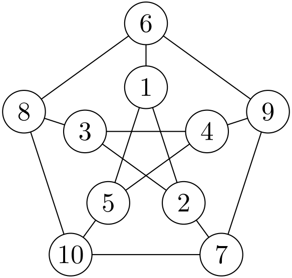
頂点可移グラフ

無向グラフ G

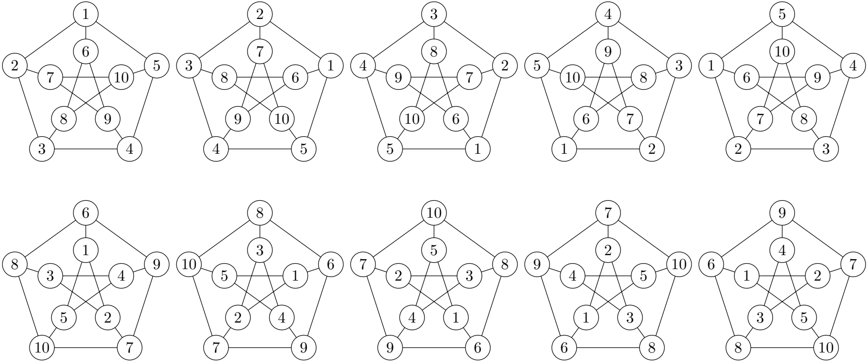
定義：頂点可移グラフとは？

G が **頂点可移** (vertex-transitive) であるとは，
任意の 2 頂点 $u, v \in V(G)$ に対して，
G の自己同型写像 f で $f(u) = v$ を満たすものが存在すること





頂点可移グラフ：例

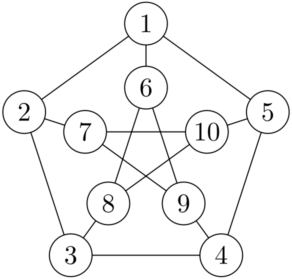

1 6 2 7 10 5 8 9 3 4
2 7 3 8 6 1 9 10 4 5
3 8 4 9 7 2 10 6 5 1
4 9 5 10 8 3 6 7 1 2
5 10 1 6 9 4 7 8 2 3
6 1 8 3 4 9 5 2 10 7
8 3 10 5 1 6 2 4 7 9
10 5 7 2 3 8 4 1 9 6
7 2 9 4 5 10 1 3 6 8
9 4 6 1 2 7 3 5 8 10

無向グラフ G

定義：独立集合とは？

G の **独立集合** (independent set) とは，頂点部分集合 $I \subseteq V(G)$ で，任意の $u, v \in I$ に対して $\{u, v\} \notin E(G)$ が成り立つもの

例：$\{1, 4, 8\}$ は独立集合であり，$\{1, 7, 10\}$ は独立集合でない



$\boxed{\text{注}}$：I が独立集合 $\Rightarrow$ I の部分集合も独立集合

無向グラフ G

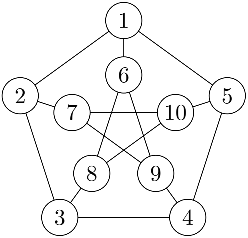
定義：最大独立集合とは？

G の **最大独立集合** (maximum independent set) とは，
要素数最大の独立集合のこと

定義：独立数とは？

G の **独立数** (independence number) とは，
G の最大独立集合の要素数のこと　($\alpha(G)$ で表す)

例：$\{1, 4, 7, 8\}$ は最大独立集合であり，独立数 $= 4$



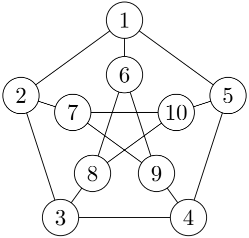
無向グラフ G

定義：独立比とは？

G の **独立比** (independence ratio) とは，次の量 $i(G)$ のこと

$$i(G) = \frac{\alpha(G)}{|V(G)|}$$

例：独立数 $= 4$，頂点数 $= 10$ なので，独立比 $= \frac{4}{10} = \frac{2}{5}$

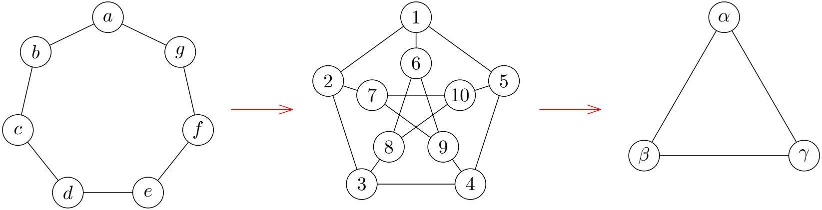


非準同型補題

無向グラフ G, H

性質：非準同型補題 (No-homomorphism lemma)　(Albertson, Collins '85)

$$\begin{array}{l} G \to H \\ H \text{ が頂点可移} \end{array} \quad \Rightarrow \quad i(G) \geq i(H)$$



$\frac{3}{7}$　　$\frac{2}{5}$　　$\frac{1}{3}$

正整数 k, ℓ

性質：奇閉路間の準同型写像

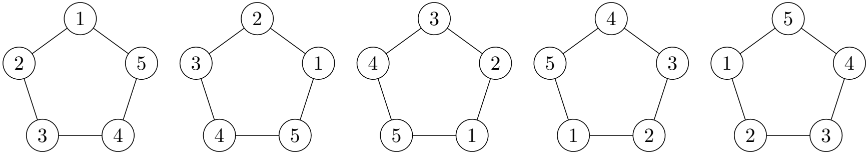
2 $k < \ell \Rightarrow C_{2k+1} \not\to C_{2\ell+1}$

証明の流れ

2 非準同型補題を用いる

2 の証明：$k < \ell$ とする

- $C_{2\ell+1}$ は頂点可移 (「回転」を考えれば良い)
- 非準同型補題より，
  $i(C_{2k+1}) < i(C_{2\ell+1})$ であれば， $C_{2k+1} \not\to C_{2\ell+1}$ となる



性質：非準同型補題 (復習)

$$\begin{array}{l} G \to H \\ H \text{ が頂点可移} \end{array} \quad \Rightarrow \quad i(G) \geq i(H)$$

$\boxed{2}$ の証明 (続き)： (仮定：$k < \ell$)

- ここで，$\alpha(C_{2k+1}) = k$ (なぜ？)
- 同様に，$\alpha(C_{2\ell+1}) = \ell$
- したがって，

$$i(C_{2k+1}) = \frac{\alpha(C_{2k+1})}{|V(C_{2k+1})|} = \frac{k}{2k+1} = \frac{1}{2}\left(1 - \frac{1}{2k+1}\right)$$
$$i(C_{2\ell+1}) = \frac{\alpha(C_{2\ell+1})}{|V(C_{2\ell+1})|} = \frac{\ell}{2\ell+1} = \frac{1}{2}\left(1 - \frac{1}{2\ell+1}\right)$$

- ゆえに，$i(C_{2k+1}) < i(C_{2\ell+1})$ □

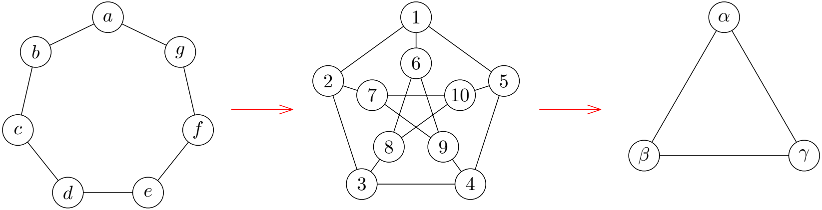
目次

非準同型補題 (再掲)

無向グラフ G, H

性質：非準同型補題 (No-homomorphism lemma)　(Albertson, Collins '85)

$$\begin{array}{l} G \to H \\ H \text{ が頂点可移} \end{array} \quad \Rightarrow \quad i(G) \geq i(H)$$

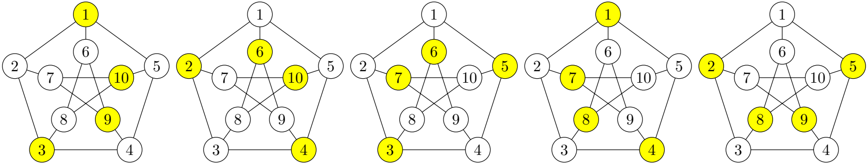


$\frac{3}{7}$　　$\frac{2}{5}$　　$\frac{1}{3}$

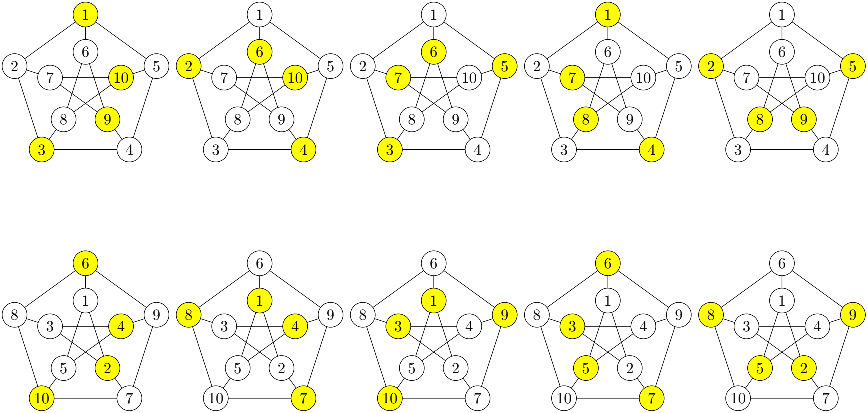
頂点可移グラフ H をまず考察する

- $\mathcal{I}(H) = H$ の最大独立集合全体の集合 とする
- H が頂点可移なので，任意の 2 頂点 $u, v \in V(H)$ に対して，

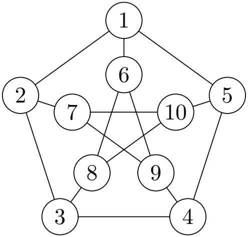
$$u \text{ を含む最大独立集合の総数} = v \text{ を含む最大独立集合の総数}$$



非準同型補題：証明 (1) — 例



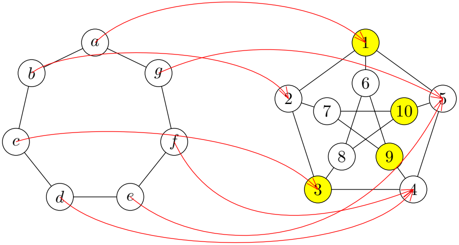
- したがって，$\alpha(H) \cdot |\mathcal{I}(H)| = m \cdot |V(H)|$



	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
$\{1,3,9,10\}$	●		●						●	●
$\{2,4,6,10\}$		●		●		●				●
$\{3,5,6,7\}$			●		●	●	●			
$\{1,4,7,8\}$	●			●			●	●		
$\{2,5,8,9\}$		●			●			●	●	

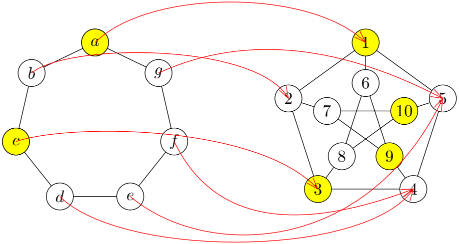
準同型写像 $g\colon G \to H$ を考える

- $I \in \mathcal{I}(H) \Rightarrow g^{-1}(I)$ は G の独立集合
- $\therefore \displaystyle\sum_{I \in \mathcal{I}(H)} |g^{-1}(I)| \leq \sum_{I \in \mathcal{I}(H)} \alpha(G) = \alpha(G) \cdot |\mathcal{I}(H)|$



準同型写像 $g\colon G \to H$ を考える

- $I \in \mathcal{I}(H) \Rightarrow g^{-1}(I)$ は G の独立集合
- $\therefore \displaystyle\sum_{I \in \mathcal{I}(H)} |g^{-1}(I)| \leq \sum_{I \in \mathcal{I}(H)} \alpha(G) = \alpha(G) \cdot |\mathcal{I}(H)|$



準同型写像 $g\colon G \to H$ を考える

- $I \in \mathcal{I}(H) \Rightarrow g^{-1}(I)$ は G の独立集合
- $\therefore \displaystyle\sum_{I\in\mathcal{I}(H)} |g^{-1}(I)| \leq \sum_{I\in\mathcal{I}(H)} \alpha(G) = \alpha(G)\cdot|\mathcal{I}(H)|$
- 一方で，$\displaystyle\sum_{I\in\mathcal{I}(H)} |g^{-1}(I)| = m\cdot|V(G)|$ (なぜ？)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
$\{1,3,9,10\}$	●		●						●	●
$\{2,4,6,10\}$		●		●		●				●
$\{3,5,6,7\}$			●		●	●	●			
$\{1,4,7,8\}$	●			●			●	●		
$\{2,5,8,9\}$		●			●			●	●	
	$\uparrow$ a	$\uparrow$ b	$\uparrow$ c	$\uparrow$ d f	$\uparrow$ e g					

準同型写像 $g\colon G \to H$ を考える

- $I \in \mathcal{I}(H) \Rightarrow g^{-1}(I)$ は G の独立集合
- $\therefore \displaystyle\sum_{I \in \mathcal{I}(H)} |g^{-1}(I)| \leq \sum_{I \in \mathcal{I}(H)} \alpha(G) = \alpha(G) \cdot |\mathcal{I}(H)|$
- 一方で，$\displaystyle\sum_{I \in \mathcal{I}(H)} |g^{-1}(I)| = m \cdot |V(G)|$ （なぜ？）
- $\therefore \dfrac{\alpha(G)}{|V(G)|} \geq \dfrac{m}{|\mathcal{I}(H)|} = \dfrac{\alpha(H)}{|V(H)|}$ $\square$

前のページの復習：$\alpha(H) \cdot |\mathcal{I}(H)| = m \cdot |V(H)|$

今日のまとめ

今日の目標

準同型の存在性・非存在性を証明するための技法を使えるようになる

- 着眼点１：奇内周
- 着眼点２：独立比 (非準同型補題)

次回の予告

準同型写像と同型写像の生み出す二項関係の性質を理解する

- 準同型写像 $\rightsquigarrow$ 擬順序関係
- 同型写像 $\rightsquigarrow$ 同値関係
- 自己準同型写像 $\rightsquigarrow$ モノイド
- 自己同型写像 $\rightsquigarrow$ 群

目次